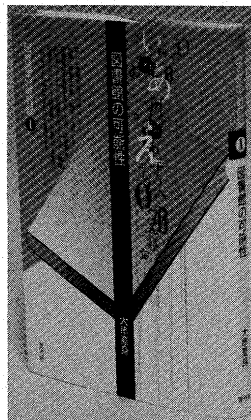


## 新刊紹介

大串夏身著

図書館の最前線<sup>1</sup>  
『図書館の可能性』

伊東達也



2007年9月22日発行  
青弓社  
四六判 218頁  
定価 2000円(本体)

昭和女子大学図書館長の大串夏身氏による『図書館の可能性』が、同氏の編になる「図書館の最前線」シリーズ第一巻として刊行された。

現在、わが国の図書館をめぐる社会的環境は、残念ながらあまり好ましいものとはいえない。財政難に苦しむ自治体だけでなく、大学においても、予算や人員の削減に加えて、さまざまな形で図書館業務の外部委託が進められ、非正規職員が増加して、図書館間のサービスの格差も広がりつつある。公共図書館も大学図書館も、組織の中でその存在意義を明らかにすべく、独自の領域を確立しようと苦心しているが、そのような現状に対して、図書館の社会的価値を高めるために有効な試みを紹介し、その将来的な展望や可能性について

考察することが、この「図書館の最前線」シリーズのねらいとなっている。

なかでも、基本となる図書館サービスの原理や本質についてあらためて確認し、図書館と図書館サービスについての共通の認識を示すことが、第一巻となる本書の役割であろう。いわばこれから最前線を展望していくための基盤づくりとして、読者に図書館という存在の原点に目を向けさせ、図書館サービスの基本とは何なのかについて考えさせる仕掛けがつけられている。

図書館の本質についての論考としては、大串氏には既に『これからの図書館』（青弓社、二〇〇二年）という、それまでの講演内容をまとめた著作がある。このなかで大串氏は、日本の図書館をめ

ぐる問題について次のように指摘した。

図書館サービスについては依然として、本は自分で買うものだ、調べものは自分でやるものだと考えている知識人の方が多数います。日本の教育はそうにして、つまり、近代以降、同じテキストをみんな同じように学び、閉鎖的な図書館で貴重なごくわずかな本を出納式で閲覧するというシステムのなかで学び育てられてきました。たくさん本のなかから自分が求めるものを選び、異なる意見のなかから自分の意見を形成するというトレーニングはできていません。そのなかでは、調べものは自分でするものだという考えはむしろ当然と言えるわけです。図書館は、そうした近代―現代日本の知識のありように挑戦し、かつ、私は従来のような知識のありようでは、日本は世界に取り残されてしまうと訴えているところです。（『これからの図書館』一四八―一四九頁）

そして、「これからの図書館は、知識の集積、知恵の創出の基盤的施設として、現在の日本全体で少なくとも五倍、できれば十倍程度必要」、「二

十一世紀を図書館の時代に」と宣言した。

この本が出版された当時、中小公共図書館の現場でもがいていた一人として、改善すべき課題と将来への展望を示されて大いに勇気づけられたことを覚えているが、今回の「図書館の最前線」シリーズは、これに続く次の段階として、従来の日本の知識のありようを変え、二十一世紀を図書館の時代にするための具体的な戦略が示されたものだともいえるだろう。

本書『図書館の可能性』の構成は、以下のようになっている。

#### 第1章 図書館の可能性

#### 第2章 「知識・情報革命」と図書館 「補論」

ひらがな・かたかなの効用

#### 第3章 レファレンスサービスと新しい技術―

サービスの基礎の構築から課題解決型サービスへ 「補論」 学校図書館でのレファレンスとは

#### 第4章 大学図書館のあり方に関して

#### 第5章 映像資料と図書館 「補論」 情報不安症 Information anxiety

#### 第6章 読書の重要性と図書館

#### 第7章 図書館の仕事と職員のスキルアップ

#### 第8章 図書館司書として生きるということ

このなかでも、直接的に図書館の社会的な役割

や可能性を論じた第1章と、それを歴史的に位置づけた第2章が、図書館サービスの基本原理を明らかにした中核部分といえるだろう。「図書館の利用を通して、人が育ち、人間として成長し、成長した人間がよりよい社会を作り出していく。これが図書館の究極の目的である」と、著者はまず定義する。図書館という存在は、この目的を果たすことによって社会のなかで無限の可能性を持つものであり、また、このために図書館ができることにも、まだ大きな可能性が残されている。

人々が図書館で入手した資料や情報、知識を活用することによって、「子育てに役立つ、健康になる、学習の成果が上がる、読書習慣が身につく、美しい図書に出会う、生活に役立つ、ビジネスに役立つ、企業経営に役立つ、研究成果がまとまる、楽しみが増える、新しいアイデアが湧く」などの効用をもたらす。このことは、まさに利用者ひとりひとりの人間としての可能性を広げることであり、このように、日常生活の中のごく普通の営みとして図書館が利用され、その効果が社会に無数に存在するようになることが「地域の質を高めることにつながる」のである。

では、必ずしもそのようにはなっていない現状を、よりよい方向へ転換していくためにはどうすればよいのか。その回答例が、次巻以降で紹介さ

れる研究や実践の事例であるわけだが、本書でも3章以降に、課題解決型サービス、映像ネットワーク、読書推進など主要なテーマについて、その可能性を示すかたちで概説されている。現在の低調なレファレンスサービスを改善し、課題解決型サービスへと発展させるための方法を説いた第3章、大学図書館のあるべき姿を示して学生の自主学习支援の具体的取り組みについて明らかにした第4章、さらに、主として公共図書館の業務の改善方法と司書としての心がまえ、スキルアップの方法などについて説かれた第7章、第8章は、日本の図書館サービスの現状を改革し、「図書館の可能性」を広げるための具体的で実践的な提言である。そしてまた、われわれ現役の図書館司書にとっては、これらの提言はそのまま大先輩からの貴重なアドバイスであり、あたたかい励ましにもなっている。

これから先、図書館を利用してどんなことができるのか。図書館とは本来どのような可能性をもったものなのか。そして、日本の図書館はどう変わろうとしているのか。図書館という身近な存在について、あらためて深く理解できる一冊である。

(いとう たつや 春日市民図書館司書)